

山吹沙綾

まり雪

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

個人的な山吹沙綾という人間の解釈を入れながら書きました。ポピパとCHISP A、彼女の大事なものいっぱい詰め込みました。嫁の誕生日なので、必死に書いたよ……。楽しかった！

沙綾、誕生日おめでとう！

# 目次

山吹沙綾

1



# 山吹沙綾

手を振って、お礼を言いながらみんなを見送る。

しばらくして四人の姿が見えなくなつてからも、一人ぼっちの部屋に戻るのが何となく嫌で、玄関の前で立ち尽くしていた。そんな私を不思議に思つたのか、お母さんが声をかけてきて私は慌てて家の中に戻つた。

部屋着に着替えて髪を下ろして、ベッドに横になる。ついさつきまでお菓子の袋やらジュースのゴミやらで散らかつていたけれど、今はきれいに片づけられて昨日と何も変わらぬ。まるでここだけ時計の針を巻き戻したみたいだ。

寝つ転がりながら、寂しさを紛らわすようにスマホの電源を入れる。

カメラフォルダを開くと、小さなディスプレイに今日撮つた写真が次々と表示されていく。今日一日で何枚くらい撮つたんだろう？ もう自分でも数えきれないくらいだ。

最初の方に出てくるのは、さつきまでここで騒いでいたポピパのメンバーたち。子供みたいにケーキにかぶりつく香澄。それを注意する有咲。口ひげみたいになべつとりと生クリームがついてるおたえ。それを拭きとつてあげるみりん。

そんな写真たちを見ながら、本当に今日一日楽しかったとため息をつく。

続いて、学校からうちまでの帰り道を歩くみんな。そして教室で色んな人にプレゼントをもらう私の写真。私が写ってるものは全部香澄が撮ってくれた。「さーやの誕生日なのに、さーやが一枚も写らないのはおかしい！」って言うてくれて、自分が写真に写るのは恥ずかしかつたけど、嬉しかつたなあ。

そうそう。学校でも色んな人に祝ってもらえてびつくりしたんだ。なによりも、今年にはC H i S P Aのみんなからも誕生日プレゼントをもらった。ううん。もらった、というより、もらえた。私自身が、彼女たちからプレゼントをもらうことをやつと許せた。ずつとナツたちになにかをしてもらう権利なんて、私にはないと思つてたから。

楽しみにしていた初ライブをぶち壊しにしたことと、話し合うこともせず一方的にバンドを辞めたことへの罪悪感。それはまだ完全に消えたわけではないし、昔とまったく同じように彼女たちと話せているかといわれるとそうではないと思う。まだどうしても心の棘が抜けない。もしかしたら、一生抜けないのかもしれない。

だれかに迷惑をかけるくらいなら、自分だけが困ればいい。そう思つてすぐに自分の本音を隠す。隠して隠して、でも結局は誰かを困らせる。そんな自分が嫌いで、ただ家のことも放っておけなくてどうしようもなくて。

C H i S P Aを辞めてからポピパに入るまで、心の底から笑えたことなんて一回もなかったように思う。いつもどこかに罪の意識が棘みたいに刺さつて、でもそれを抜く

痛みに耐える勇気もなくて、ずっとそれを抱えたままだった。だけど。

この棘が背中を押してくれたから、私はあの時走りだせたんだと思う。もう繰り返したくないから、昨日までの私にサヨナラをしようと思えてきたんだと、そう思える。

みんなが笑っている写真を見ると、不思議と色々なことを思いだした。

もしかしたら、写真にも音楽と同じ力があるのかも。

そんなことを考えながら、今日撮った写真を全部チェックして『誕生日』と書かれたフォルダに移していく。

香澄が間違えて連写しちゃったやつとか、おたえが撮ってくれたぶれぶれの私の写真とかもぜんぶ。

それらをもう一度、一枚一枚人差し指でめくりながら、その時の会話や空気、おいや音と一緒に自分の心に描き写していく。

「忘れないよ、絶対に」

そう言葉にしなから、スマホを抱きしめる。

まだまだ弱虫な、こんな私を必要としてくれたみんなとの、大事な大事な思い出だから。

私が自分で掴んだ、私の大切な居場所だから。

すると、その瞬間スマホがブーブーとけたたましく鳴いた。

驚いて画面を見ると、LINEの通知が二十件近く来ていた。慌ててアプリを開いて確認する。

「……………あははっ」

思わず声をあげて笑ってしまった。画面の中には、ポピパのグループラインに次々と自分のスマホで撮った写真をあげていく香澄とおたえ、慌ててグループアルバムを作りみりんと、通知がうるさくてぶんぶん怒っている有咲がいた。

「私も参加しよーっ」と♪

そう言いながら、お気に入り写真の誕生日フォルダの中から選んでいく。

だけど結局選びきれなくて、山のように大量の写真を送ってしまった。

これは明日、有咲にたっぷりしぼられそうだなあ。

お昼休みの生徒会室で香澄とおたえと私がお説教されて、りみりんがそれを必死になだめて……………。そんな光景が当たり前に目に浮かび、自然と頬が緩む。

早く明日にならないかなと遠足前日の子供みたいにそわそわしながら、私は電気を消してあたたかいベッドに潜り込